

猫又様のお年越し

矢杉 麻衣

猫の国にも大みそかがやって来た。一年の最後の日、みんな、なんとなくあわただしい。「あーっ、どうしよう。卵買ってくるの忘れちゃった!」

母ちゃんの叫びが台所に響いた。

「きゃー、かまぼこにカビが生えてる! 父ちゃんっ、ちゃんと賞味期限見てかっばらってきたんでしょっね!？」

「……んー? どうだったかな。忘れちゃったなア、わはははは」

……いや、あわただしいのは、うちの母ちゃんだけかも知れない。私は、ぬくぬくのこたつから顔だけ出して台所の方を見た。こんなに寒いのに、母ちゃんよく仕事してられるなあ。それに比べて、こたつの中は天国だ。私他に、父ちゃんと兄ちゃんも入っていてきついけど、まあそこは大目に見てあげよう。

「ぶわつくしよい!」

兄ちゃんが盛大にくしゃみをした。ティッシュを一枚取って、びーっ、と鼻をかむ。で、丸めたところまではよかつたんだけど、ゴミ箱は、はるか部屋のすみだ。兄ちゃんはちよっと考えてから、ねらいを定めて、ばい、とゴミ箱の方にティッシュを投げた。

「おおっ!」

思わず私は声を上げた。兄ちゃんの投げたティッシュの玉は、見事な曲線をえがいてゴミ箱の方へ飛んだ。玉がゴミ箱のふちに当たって、ぼんぼんはねる。よしっ、もうちよっとだ、入れ、

入れ！ 兄ちゃんも私も、向こうの方に顔が出ている父ちゃんまで、精いっぱい首をのばして、その様子を見守った。

「入るか！？」

「っ……、あーあ」

張りつめていた空気が一気にとけた。ティッシュの玉はゴミ箱のすぐ下に転がっていた。「おしいっ、惜しすぎるよ兄ちゃん！」

「いやあ、実に惜しかった。しかしねぎ男、まだ次がある！ 希望を捨てるなっ」

「と、父ちゃん、しじみ、ありがとうっ。おれ、がんばるよ！」

「そっだ、あきらめるな兄ちゃん！ さあ、もう一回ティッシュを……」

私がそこまで言ったとき、黒い影が台所から、ぬっつと現れた。ま、まずい、母ちゃんがおこった！

「三人とも！ さつきから聞いてれば、ぐだぐた、ぐだぐだ。一年の最後ぐらい、横着しないっ、仕事をしなさいっ！！！」

「は、はいっ！！！」

私たちはコタツから飛び出して、さながら隊長の前へ整列する部下のように、直立不動で敬礼をした。

結局、その日一日私たちは、家の片づけをしたり、店のそっじをしたり、明日（といつか来年）食べるおせちを用意したりと、わき目もふらず働いた。いや正確には、母ちゃんの目が光っていたからサボれなかったのだ。

そうして、ようやく最後のそうじ道具を片づけ終わったときには、もう日が暮れようとしていた。

「わあああ、今年最後の一日がアッ。丸々つぶれちまったあ……」

父ちゃんの情けない声が、きれいになった座敷にこだまする。きっとこの言葉の後には、「せっかく酒でも飲んでゆつくりしようと思ったのに」っていう心の叫びも続くんだろ。でも、私も兄ちゃんも同じだけ働いたんだからね、不公平じゃない。ああ、でも、疲れまで平等にやって来るのはいやだったなあ。私は腰をトントンたたいた。ばあさん猫ってこんな気持ちなんだろ。うか。

「まあまあ、いいじゃないの。家もきれいになったし、おせちの下ごしらえもできたし。それにね、まだ一日は終わってないのよ！」

明るい母ちゃんの声が、やけに大きく聞こえた。まだ終わってない？ この上何をすると言うんですか、母ちゃん。

母ちゃんは、ぐいっところちらに身を乗り出して、ふふふ、とあやしく笑った。

「二年参りよ」

それを聞いた父ちゃんが、ひょえっ、とおののく。

「に、二年参り……っ」

「っ、何だっけ」

私は首をかしげた。どっかで聞いたことがあるような、ないような。

「もう、しじみはおどしがいなくて面白くないわあ。二年参りっていうのはね、大みそかの晩に神社にお参りをして、そこで新年を迎えてすぐに、またお参りするの。そうすると二年続けて

「お参りしたことになるでしょ？」

「へえ、だから二年参り」

「そういうこと」

なるほど、それは理解できた。でも母ちゃん、それで私たちにどうしろと？

「もちろん、みんなで猫又様へ二年参りに行くに決まってるじゃない。ねっ、父ちゃん」 父ちゃんは、引きつった笑いをうかべた。

なぜ父ちゃんが二年参りをいやがるのかわからないまま、母ちゃんに引っぱられて、私たちは近所の猫又神社へ出かけた。猫又様はノミ除けの神様だ。ありがたや、ありがたや。いつもなら、あまり猫のいない神社だけど、今日ばかりは、明々とかがり火がたかれ、たくさんのアルバイト巫女さんが、お守りや新年用の猫だるまなんかを売っている。チョコバナナやからあげの屋台もあって、境内はちよつとしたお祭りのようだ。

「うわっほい！ お祭り好きの血がさわぐ！」

私は、うでまくりのフリをしてみせた。

「ほらねー、来て良かったでしょ」

得意顔で言う母ちゃんに、私と兄ちゃんはうんうんうん、とつなずいた。

「さあさ、今年のうちにも一回お参りしておきましょう」

私たちは橋を渡って島の社へ向かった。水面にかがり火が映って、ゆらゆら揺れていた。おさい銭を上げて、カラカラ鈴を鳴らして二回手をたたく。

「今年はお世話になりましたっ！」

頭を下げながら私が大きな声で言うと、周りにいたおばさん猫がくすくす笑った。おかしいな、私、何か変なことしただろうか。うーん……まあ、いいや。それより私は、さっきから気になっていることがあるんだ。

「ねえ、母ちゃん。甘栗が食べたい」

来るときに見てからずつと食べたかったのだ。夜の冷えた空気にはかほかの甘栗……いいなあ。ああもつつ、想像したらもつと食べたくなっちゃった。

「仕方ないねえ、ほら、お金あげるから買つといで。 あっ、兄ちゃんと分けて食べるのよ！」

「はいはい、分かつてますぜ親分！」

いやあ、父ちゃん。あなたはいやがってたけどね、なかなかどうして、二年参りって楽しいじゃないですか！

……そうでもなかった。いや、途中まではそれでも良かったのだ。でも神社で年を越すということとはつまり、真夜中すぎまで起きていなければいけないということで、それを私は、全然考えていなかった。

「眠い……」

ずいぶん前から重くなり始めているまぶたを、私は必死でこじ開けた。私たちは、初もつでを待つ行列に早々とならんでいるのだけど、私はもう、そこにじっと立っているのもつらい。

「ほおらな。だからおれは来るのがいやだったんだよ。ふわわわわ」

父ちゃんが寝ぼけた声で私に言った。誰ださっき「二年参りは楽しい」って言ったのは……あ、私か。兄ちゃんも、妙ちきりんな顔になっていた。より目になって空中をにらみなおかつ鼻にし

わがよっている。よつぼど眠いらしい。どうやったたらあんな顔になるんだ。元気なのは母ちゃんだけ。平気な顔して順番待ちをしている。なんだかんだ言いつつ、こういう所、母ちゃんは偉大だ。

「……さむ」

私はぶるりとふるえた。耳をすますと、遠くで除夜の鐘が、ごおおおん……、と鳴っている。かがり火が揺れた。

眠い頭で私は、ああ今年も終わりなんだ、と思った。神社の木々の枝ごしには、寒い冬の星。隣に目をやれば、あいかわらずしゃきつとした母ちゃんと、半分夢の中の父ちゃんと、変な顔の兄ちゃんがいる。

はかまをはいたおっちゃんが、時計を見て年明け一分前のカウントダウンを始めた。二十秒前くらいから、段々と他の声が重なり、十秒前には、境内にいるほとんどの猫が声を出していた。私も、眠気を追いはらうように大きな声で数をかぞえた。

「十、九、八、七」

私のはいた白い息が、ほう、と流れる。

「六、五、四」

かがり火の映る池に、風が渡った。

「三、二」

ああ、今年最後の風だ。

「一」

ドドン、と、太鼓の大きな音が辺りに響き、ざわざわと社に向かう猫の波ができた。流れにも

まれながら、私の番が回ってきた。鳴り止まない太鼓の音の中で、さい銭箱に小銭を投げてお参りをする。横目でとなりを見ればあいかわらずしゃきつとした母ちゃんと、半分夢の中の父ちゃんと、変な顔の兄ちゃんがいる。一月一日も、みんないっしょだ。

―今年も、良い年になりますように。

声に出さないお願いをして、私は、深く深く頭を下げた。

(おわり)